

山口情報芸術センター [YCAM] 企画展

LabACT vol.1 視線を通じて世界と繋がる。—視線入力技術

「The EyeWriter (ジ・アイライター)」

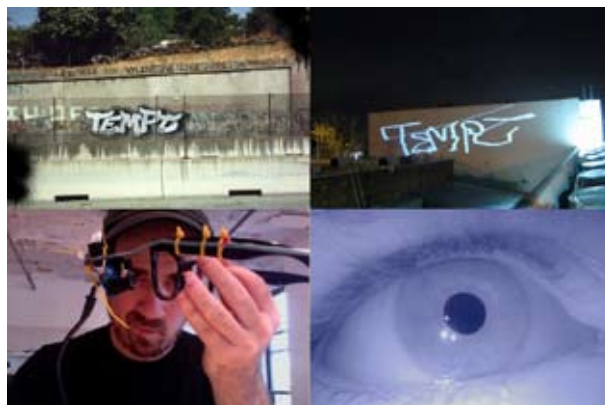
2011年10月1日(土) -12月25日(日) 10:00-20:00 (作品体験は11:00-17:00)

山口情報芸術センター [YCAM] ホワイエ 入場無料

視線で絵を描く。視線による描画装置「The EyeWriter」を体験できる展覧会プロジェクトの全容を紹介し、YCAMがその応用を試みる。

山口情報芸術センター [YCAM] では、メディアアートの技術的な側面に着目し、科学とアートの対話が生み出す創造性について、社会的な意義を含む幅広い視点から紹介する展覧会シリーズ「LabACT (ラボ・アクト)」をスタートします。今年度は、視線の動きを検出する「視線入力技術」をテーマに、2つの展覧会を開催。1回目は、アメリカを拠点に、視線による描画装置を開発するプロジェクト「The EyeWriter (ジ・アイライター)」を紹介します。

本展では、プロジェクトの全容と、技術開発のプロセスを紹介するほか、最新型の装置を実際に使い、視線で絵を描く体験ブースを開設。さらに、開発技術を応用した新作インスタレーションの展示や、ワークショップを開催します。「The EyeWriter」の応用を含む、多角的なアプローチを試みる本展を通じ、メディアがもたらす技術や思想、アート表現の発展性を紹介します。



© Tempt1, Evan Roth, Chris Sugrue, Zach Lieberman, Theo Watson and James Powderly

■ 出展作家: **The EyeWriter 開発チーム** ザック・リーバーマン、エヴァン・ロス、ジェームズ・パウダリー、テオ・ワトソン、クリス・サグリユ、TEMPT1
エキソニモ
セミトラ

ぜひこの機会に、取材や記事掲載ご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

お問い合わせ 山口情報芸術センター [YCAM] 広報担当: 廣田
TEL: 083-901-2222 FAX: 083-901-2216 e-mail: information@ycam.jp
〒753-0075 山口県山口市巾着町7-7 <http://www.ycam.jp/>
取材に関するお問い合わせ、プレス用写真等ご入用の方は上記までご連絡ください。

YCAM企画展の新シリーズ「LabACT」

アートが探求する技術と、技術が拓くアート表現。その創造性を紹介する展覧会。

山口情報芸術センター [YCAM] の新シリーズとなる企画展「LabACT (ラボ・アクト)」は、メディアアートの技術的な側面に着目し、科学とアートの対話が生み出す創造性について、幅広い視点から紹介する試みです。

情報技術やメディアテクノロジーを駆使したメディアアート作品において、その技術的な探求は、次代のコミュニケーションを見据えた社会性や公共性をもたらし、その開発や蓄積は、新たな表現を拓いています。本展では、アーティストとのコラボレーションによって多数の作品を制作／発表してきたYCAMの活動を生かし、研究と開発 (Research & Development) の実践から、技術の共有 (シェア) の思想や、福祉貢献を含む社会的な意義を踏まえたメディアアートの更なる可能性について考えます。

2011年度のテーマは「視線入力技術」

アートにおける、技術的な応用と発展性を実践する2つの展覧会

2011年度は、眼球の動きによる視線の変化をセンシングプログラムで検出する「視線入力技術」をテーマに、メディアアーティストを中心に社会的な活動を続けるプロジェクトと、視線によるコミュニケーションを実現するアート作品を、会期を2期に分けてご紹介します。いずれも、YCAM専属の研究開発チームYCAM InterLab*が、作品の開発やアップデートに参加し、エンジニアの方法論やアイデアを反映するコラボレーションを展開します。

「LabACT」第1弾では、目の動きだけで絵を描く装置を開発するプロジェクト「The EyeWriter (ジ・アイライター)」をテーマに、その活動の全容と、オープンソースソフトウェアの応用例となる2つの作品を展示します。第2弾では、「観ることそのものを視る」というコンセプトを追求する、三上晴子による新作インスタレーション「Eye-Tracking Informatics (アイトラッキング インフォマティクス) ~視線のモルフォロジー」を公開します。1996年に発表された作品「Molecular Informatics (モレキュラー・インフォマティクス)」に、最新技術を反映したリメイク版となる本作は、仮想空間を共有する2人の体験者が、映像に映し出される視線によって触覚的ともいえる対話を実現します。メディアアートの世界的な代表作品が、技術的なアップデートでどのように生まれ変わるのか。技術がもたらす表現の発展性を試行します。

YCAM企画展シリーズ「LabACT」

2011年度テーマ:

視線を通じて世界と繋がる。— 視線入力技術

LabACT vol.1

「The EyeWriter」(ジ・アイライター)

2011年10月1日(土) - 12月25日(日)



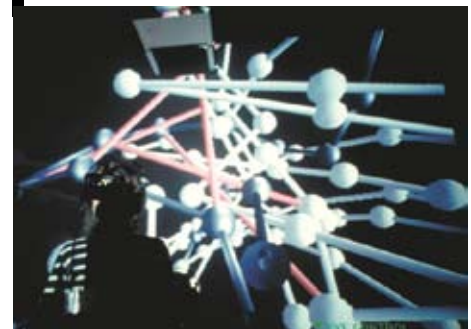
「The EyeWriter」プロジェクトの様子(2010)

LabACT vol.2

「Eye-Tracking Informatics」

(アイトラッキング インフォマティクス)

2011年12月4日(日) - 2012年3月25日(日)



三上晴子「Molecular Informatics Version 3.0」(1998. Maison des Arts de CRETEIL & Le Manège Maubeuge, フランス)

* YCAM InterLab

研究開発チーム

山口情報芸術センター [YCAM] に専属するメディアアートを専門とした研究開発チーム。YCAM委嘱作品となるインスタレーションやパフォーマンス作品のための技術開発を専門とし、アーティストや外部エンジニアとの共同開発、作品への技術協力をおこなっている。また、最新技術の芸術表現への応用について研究・実践するほか、文化施設における技術者間の交流と人的ネットワークの構築、研究領域の拡大・普及を目的とし、国内外から研究者を招聘した共同研究などに積極的に取り組んでいる。

<http://interlab.ycam.jp/>

「The EyeWriter」の活動から、技術が拓く創造の多様性、社会的な意義に迫る。

「The EyeWriter」は、ALS（筋萎縮性側索硬化症）で体が麻痺したアメリカのグラフィティアーティストが「再び絵を描けるように」という願いをきっかけに、2010年に始まったプロジェクトです。アーティストやエンジニアをはじめ、世界各地の多くの参加者によって、オープンソースソフトウェアと手軽なデバイスによる、目の動きだけで絵を描く装置が開発され、現在も改良が進められています。

本展では、新しいテクノロジーと、技術や情報のシェアの思想を色濃く反映した本プロジェクトの活動を紹介するほか、最新版となる「The EyeWriter 2.0」の体験ブースを設置。さらに、オープンソースとして公開されている視線入力ソフトウェアを応用した2組のアーティストによる体験型の新作インスタレーションを展示します。

視線による描画装置「The EyeWriter」とは

コンピュータの入力デバイスなどに多用される視線認識技術（＝人の眼球の位置を割り出し、視線を認識するシステム）を、低コストで実現し、視線による描画システムへと応用するため、「The EyeWriter」では、視線入力ソフトウェア（Eye-Tracking Software）と、視線描画ソフトウェア（Eye-Drawing Software）を開発。メガネ型の操作デバイスを導入したプロトタイプ（バージョン1.0）から改良を重ね、現在では、高度なキャリブレーション技術を施したデバイス装着不要の新型（バージョン2.0）を実現しています。また、プロジェクトに関する社会的なネットワークも生まれ、医療や福祉の現場での有効性や、描画による表現の可能性など、より多面的な研究もおこなわれています。コンピュータと身近な機器を組み合わせ、無料で取得できるソフトウェアをインストールすることで、誰もが制作／活用できる「The EyeWriter」は、汎用性の最も優れた、視線による描画装置といえます。

展示1

「The EyeWriter」

プレゼンテーション展示

「The EyeWriter」プロジェクトの記録映像や解説映像、パネル展示のほか、会場の特設ブースでは、「The EyeWriter 2.0」を、実際に体験することができます。観客は、視線認識のためのキャリブレーションの後、視線でグラフィティを描いたり、ゲームをしたりと、複数のコンテンツを楽しむことができます。「The EyeWriter」についての理解と体験を促す展示を通じ、技術の共有によって発展を続け、社会的な意義をも見出すプロジェクトのあり方を紹介します。



[上] TEMPT1による「The EyeWriter」を用いた描画の様子

[中]実際にビルに投影されたグラフィティ

[下]「The EyeWriter」によって描かれたグラフィック作品

© Tempt1, Evan Roth, Chris Sugrue, Zach Lieberman, Theo Watson and James Powderly

作家プロフィール

The EyeWriter 開発チーム

アーティストやデザイナー、プログラマーとして活躍する6人の初期メンバーを中心に活動。メディアアーティストであり、プログラミング言語C++をベースにしたフレームワーク「openFrameworks」の開発者であるザック・リーバーマン、テオ・ワトソン、クリス・サグリユのほか、Free Art and Technology (FAT)やGraffiti Research Labのメンバーとして活躍するエヴァン・ロス、ジェームズ・パウダリーが参加。それぞれに、アルス・エレクトロニカFuture lab（リンツ）やEyebeam（ニューヨーク）などのメディアアートを専門とする施設にも所属。同メンバーのグラフィティライター、TEMPT1（テンプト・ワン）は、雑誌の発行人や活動家としても活躍し、「The EyeWriter」によって、グラフィティライターとしての創作を再開している。

<http://www.eyewriter.org/>

「The EyeWriter」の応用で生まれる、新たな表現。体験型の新作を初公開。

本展では、「The EyeWriter」にて公開されている視線入力ソフトウェア (Eye-Tracking Software) を応用した新作インスタレーション2作を初公開します。アートユニットのエキソニモと、セミトラの豊かな発想力と、視線入力技術が結びついた体験型の作品を通し、アートと科学が拓く創造の可能性、技術共有が生み出す表現の発展性に触れることができます。

展示2

エキソニモ「EyeWalker (アイウォーカー)」

新作(YCAM委嘱作品) 2011 | インスタレーション

視線の動きによって、視覚の跳躍を体験することができる作品。YCAM館内には、オブジェとなるビデオカメラ付きモニターが様々な角度で、距離を置いて配置され、体験者がいるブース内のモニターには、会場の風景が映し出されます。体験者が、モニター画面に映るオブジェを見つめると、その画面は、オブジェからの中継映像へと次々と切り替わっていきます。

本作では、「The EyeWriter」のソフトウェアを応用して、体験者が、モニター内のどのオブジェを見ているかを検出し、中継映像を選択しています。ブース内のモニターに映る映像に没入する体験者の視覚は、自らの視線が向くオブジェへと転移し、次々と展開されていくことになります。映像に囚われた私たちの没入感覚を極端に増幅し、現実の空間を次々に跳躍するかのような視覚をもたらす本作は、見る行為と自身の存在にある関係をも揺さぶります。

展示3

セミトラ「eyeFont (アイフォント)」

新作(YCAM委嘱作品) 2011 | インスタレーション

体験者の視線の動きを使って、文字書体(フォント)をつくり出す作品。YCAMで2009年に開催したセミトラの個展「tFont/fTime」で展開した、文字デザインを探索するプロジェクトの最新バージョンとなる体験型のインスタレーションです。

体験者は、ブース内のモニターに映し出される文字を見つめ、その文字を自らの視線で上書きします。視線によって描かれた文字は、データベースに送られ、展示期間中常にアーカイブ化されます。視線の動きを使って線を描くという行為は、不自由さと同時に、習熟や洗練のない未知の体験といえます。意識によってコントロールされつつも、完全には制御できない人間の生体が作り出す文字=フォント。視線による文字書体は、どこで均整が保たれ、何によって個性的な変形が生まれるのか—。多様なバリエーションを含む文字が蓄積される本作を通じ、視線による文字デザインが提示されます。

エキソニモ | exonemo

アートユニット

photo: Nonoko Kameyama

怒りと笑いテキストエディタを駆使し、様々なメディアにハッキングの感覚で挑むアートユニット。1996年、千房けん輔と赤岩やえでウェブ上で活動を開始。2000年よりインスタレーション、ソフトウェア、デバイス、パフォーマンス、イベントプロデュースなど幅広い活動を展開。デジタルとアナログ、ネットワーク世界と実世界を柔軟に横断しながら、テクノロジーとユーザーの関係性を露にする、ユーモア溢れる切り口と新しい視点を携えた実験的なプロジェクトを手



掛ける。2006年には「The Road Movie」で、アルス・エレクトロニカネット・ビジョン部門でゴールデン・ニカ賞受賞。2010年には、「ANTIBOT T-SHIRTS」で、東京TDC賞RGB賞受賞。YCAMでは、2006年に個展を開催するほか、多数の作品を展示している。

<http://exonemo.com/>

セミトラ | Semitra

アートユニット

ネットワークとリアルスペースを連動した独自のデザイン手法を開拓し、カンヌ国際広告祭、クリオ賞、One Show、New York ADC、D&ADなどの広告賞を多数受賞しているクリエイター集団「Semitransparent Design」(メンバー: 田中良治、



菅井俊之、柴田祐介、佐藤寛、萩原俊矢、柏木恵美子)から生まれたアートユニット。ビジュアル、プログラム、ネットワーク技術を駆使して、ウェブ、インスタレーション、写真、映像など、メディアの形態を選ばず多岐に渡るアイデアの作品を発表している。独自に開発した時間軸をもったフォント「tFont」を使ったインスタレーションやワークショップも展開。YCAMでは、2010年に個展「tFont/fTime」を開催し、新作インスタレーション4作を同時発表した。

<http://www.semitransparentdesign.com/>

関連イベント

シンポジウム「The EyeWriterをめぐって一開発と共有の先に見えるもの」

10月1日(土) 15:30-18:00 参加無料 会場:スタジオA

パネリスト: ザック・リーバーマン、エキソニモ、

田中良治(セミトラ)、安藤英由樹(大阪大学工学部准教授)

モデレーター: 阿部一直(YCAM)、伊藤隆之(YCAM InterLab) *逐次通訳あり

作家による出展作品のプレゼンテーションのほか、専門家を交えたディスカッションを開催。技術が生み出す表現の可能性や、シェアカルチャーによる発展性など、科学とアートの融合によってもたらされる社会的な意義や将来性について考えます。

YCAMオリジナルワークショップ「Eye2Eye (アイ・トゥ・アイ)」

10月1日(土)、11月6日(日)、12月4日(日) 各日 13:00-15:00[各日完結/全3回]

会場:スタジオA 講師:YCAM教育普及スタッフ

対象:小学4年生以上 定員:20人 料金:500円 ※要申込

「The EyeWriter」の視線入力ソフトウェアを応用したワークショップ。自らの視点が可視化されたり、視線の軌跡を他者と共有したりと、簡単なゲームを通じて「視線」から生まれる様々なコミュニケーションを体感します。マーケティングや心理学、経済学においても関心が高まる「視線」について、その多様な可能性を考えます。

申込方法:

はがき・FAX・e-mailにて、住所、氏名(ふりがな)、性別、年齢、電話番号・e-mail等連絡先とともに、下記までお申し込みください。

山口情報芸術センター「Eye2Eye」係

〒753-0075 山口市中園町7-7 FAX:083-901-2216 e-mail:workshop11@ycam.jp

YCAMギャラリーツアー【会期中18回】

10月8日(土)、9日(日)、10日(月・祝)、15日(土)、

16日(日)、22日(土)、23日(日)、29日(土)、30日(日)

11月3日(木・祝)、5日(土)、6日(日)、12日(土)、19日(土)、26日(土)

12月10日(土)、17日(土)、18日(日)

各回 14:00-15:00 参加無料

※各日開催までにYCAM1Fチケットインフォメーションまでお申し込みください。

開催概要

山口情報芸術センター [YCAM] 企画展

LabACT vol.1 視線を通じて世界と繋がる。— 視線入力技術

「The EyeWriter (ジ・アイライター)」

2011年10月1日(土) - 12月25日(日) 10:00-20:00 (作品体験は11:00-17:00)

会場:山口情報芸術センター [YCAM] ホワイエ 入場無料

休館日:火曜日(祝日の場合は翌日)

出展作家:

The EyeWriter 開発チーム ザック・リーバーマン、エヴァン・ロス、ジェームズ・パウダリー、テオ・ワトソン、クリス・サグリユ、TEMPT1
エキソニモ
セミトラ

シンポジウムパネリスト

ザック・リーバーマン | Zach Lieberman

メディアアーティスト/プログラマー

ジェスチャー入力や身体の拡張に関する研究開発を取り入れたパフォーマンス、インストール作品、オンラインで作品を制作/発表するほか、世界各地で数多くのプロジェクトを展開。プログラミング言語C++をベースにしたフレームワーク「openFrameworks」の開発者としても知られる。遊び、コミュニケーションの本質、情報の可視/不可視の境界に迫るユニークな方法でテクノロジーを活用し、展覧会や教育の現場でグローバルに活動を展開。アルス・エレクトロニカやCYNETartをはじめとするフェスティバルでも、数多くの賞を受賞している。
<http://thesystemis.com/>



安藤英由樹 | Hideyuki Ando

研究者

大阪大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻准教授。博士(情報理工学)。人間情報工学を専門とし、錯覚を用いた非言語的インタフェース、バーチャル・リアリティなどを研究する傍ら、佐藤雅彦との共作で「これでも自分と認めざるをえない」展(21_21 DESIGN SIGHT、東京)に参加するなど、専門領域を題材とした作品制作にも意欲的に取り組む。2008年文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞受賞、アルス・エレクトロニカ(リンツ)2009、2011にてインタラクティブ・アート部門Honorary Mention受賞。

<http://www-hiel.ist.osaka-u.ac.jp/~hide/>

主催:公益財団法人山口市文化振興財団

後援:山口市、山口市教育委員会

支援:文化庁「平成23年度メディア芸術人材育成支援事業」

協賛:株式会社資生堂

技術協力:YCAM InterLab

企画制作:山口情報芸術センター[YCAM]

キュレーター:阿部一直(YCAM)

テクニカルディレクター:伊藤隆之(YCAM InterLab)